ささやかな望み

（財）リバーフロント整備センター　専務理事　　砂川　孝志

私のささやかな望みの一つにもう一度“満天の星”を見たいということがある。

私が子供の時はまだ夜が暗かった。街灯がない。車も走っていない。そんなとき空を見ると天の川をはじめ星々がくっきりと見え、片手の星座表と見比べながら目でなぞることができた。今や夜昼なく街は24時間活動し続けている。家の灯りが漏れ、街灯が並び、ライトをつけた車が走り、おまけに観光、地域振興等でライトアップさえされている。おかげですっかり星が見えなくなった。

子供の頃の夜空をもう一度見たいと思い始めたのは年のせいかもしれない。特に50を過ぎたあたりからその思いが強くなってきている。しかし、これが意外に難しい。

まず何よりまわりに光がないところに行く必要がある。現在私が住んでいる関東平野のはしのニュータウンからでも相当の時間をかけて行くことが必要になる。そこで光の少ない地域への出張や旅行の機会が狙い目になる。しかし、こういう機会はそう多くはない。また地形の要因もある。山間部の方へいくと山の斜面があり、また樹木も多いので視界が相当限られる。満天と言うことになればある程度広い視界がえられる地形が必要である。そして何といっても天候の条件が絶対必要だ。大気が澄んでいて、かつ夜に快晴でなければならない。雨だったり曇っていたりしていて、多くの場合これでダメになる。またできれば月の光が見えない新月の頃であれば最高である。さらに付け加えれば体調も良好であることが重要だ。旅行に出るとついついアルコールをとってしまい、ささやかな願いを忘れてしまう。いくら飲んでもこれを忘れないだけの強靱な体力が必要である。これらの条件を全てクリアして初めて願いが叶う。

数年前に尾瀬へ行った時には一晩中雨で全くダメだった。初冬に車で赤城山の頂上を目指した時には途中から急に雪になりあわてて戻った。ケニヤへ行った時はナイロビの排気ガスの影響もあるのだろうか、空が霞んでいたし、場所的には期待したパプアニューギニアへ行ったときもやはり曇っていたり、体調不備で見ることができなかった。振り返ると強烈に記憶に残っているのは30数年前北海道の然別湖で見た星空で、まさに満天の星で星が降るとはこういう空をいうのかという夜だった。現在の然別湖はどうだろうか。

古来、日本では叙情的には月への思いに比べ星に対する思いは遙かに少なかったようにみえる。万葉集、古今和歌集等でも星の歌は月の歌に比べ格段に少ないようだ。星は叙情的、或いは叙景的というより呪術的な見方をされてきていたという説もあるようだがよくわからない。いつかその理由を知りたいと思っている。ただその中でも清少納言の枕草子には“星はすばる。ひこぼし。ゆふづつ。よばひ星、すこしをかし。”とあるし（ゆふづつは金星、よばひ星とは流れ星のことといわれている）、江戸時代にはいると松尾芭蕉の、雄大で有名な句“荒海や　佐渡に横たふ　天の川”があり、日本でも星への思いがなかったわけではなさそうだ。ちなみに小林一茶の句には“うつくしや　障子の穴の　天の川”があり日本的な軽妙さ、悟りの世界があり、こちらの句の方が好きな人も多い。

一方、時代はぐっと下がって、最近ではプラネタリウムを設置する博物館等が増えてきているらしい。星のファンが増えたのだろうか。最近流行の癒し効果も期待してだろうか。制作技術も大幅に進歩して、私のような矯正視力1．0では現実に見れないような星まで再現しているとのことで、バーチャルではあるとしても一度行ってみたいと思っている。

満天の星を見ることができないのは防犯上も含め経済社会状況からやむを得ないとは思いつつも、やはりあの星空をもう一度見たいという思いはつのる。星が見えないのは普段から自然に接することが少なくなったという20世紀の負の遺産の一つでもある。景観法も制定された現在、夜の景観、ライトで演出された景観ではなく、星空景観を積極的に作っていくことがあってもいいのではないか。

平成８年に定められた“川の日”は７月７日で、これは天の川の七夕伝説にもちなんで定められたと聞いている。天空に広がる清冽なそして巨大な河への思いを私たちはもっと持ってもいいと思う。